

掛軸のしおり

床の間と掛軸

1 床の間の起源

鎌倉時代以後中国の宋、元から掛軸や花器、香炉等の工芸品が輸入され、それを室内に飾ることか当時の上流階級の人々の間に流行しました。

始めは壁面に仏画などを掛け、前に卓を置いてその上に香炉、花入、燭台などを飾っていましたが、その後「押板」と呼ばれる幅30センチ程の厚い板を座敷正面の窓ぎわに置いて、その上に花入やその他の美術品を飾っていました。

室町時代になって室内に畳が敷かれる様になるとその「押板」が壁を60センチ程奥に引っこめ、作り付けのものになりました。

そして「押板」のある処は座敷の中でも一番重要な場所になり、畳の面よりも一段高くつくられたので「上段床」とか「床の間」と呼ばれる様になりました。

2 掛軸の起源

中国古代の絵画は強面や額形式のものが多く、一定の場所に飾られていました。晋の時代（約1600年前）になって、縦長の紙に書画を書いて木や竹の軸に巻きつけた巻物になり、壁面に掛けて観賞する形式が行われる様になりました。

日本には、平安中期よりこうした形式の書画が中国（当時、宋の時代）から入り、渡来掛軸とか軸物と呼ばれてきました。

その後、日本の画家もこれに習い、それを仕立てる表装技術も我が国で独自の発展をして今日に至ったものです。

3 床の間と掛軸の関係

前述の通り日本間には床の間を作る慣習があり、床の間は家の中で一番大切な所、一家の主人の顔で有り、主人の人格の象徴と考えられるようになりました。

従って床の間に掛ける掛軸にしても置物にしても良く吟味して高価なものとは限りませんが、筋の通った趣味の良いものが要求されます。

また、春夏秋冬という季節がはっきりしている日本では、昔から季節による情感が時や歌に詠まれ、日常生活の中にしみ込んでおります。

従って季節感のある絵画はその季節に掛けるのが常識になっております。

図柄に依る季節別掛軸一覧表

[illegible]

掛軸の取扱い方

1 観賞への心配り

表装の出来たては、糊が充分馴れていないため狂いがきたり、シミが出やすいので最初の一ヶ月間は晴れの日を選んでかけ、一週間以上続けて掛けない様にご注意下さい。

その後掛ける時は、3ヶ月以上の掛け放しは極力避けて下さい。

空調の強い乾き過ぎたり湿度の高い室内、又雨や風の強い日、日光のあたる場所ではソリやシミの原因となりますので避けて下さい。

掛物の内容は来客により、季節に合った画題を選んで下さい。

2 掛軸のかけ方

輪箱から掛物を取り出し巻緒を解き、畳の上で一文字のところまで広げ、巻緒を目だたないように左側によせ、風帯のくせを直します。

右手に矢筈を持って掛緒に掛け左手で袱紗を添えて表具の中央をささえて立ち上り、床の釘に掛緒を掛けます。

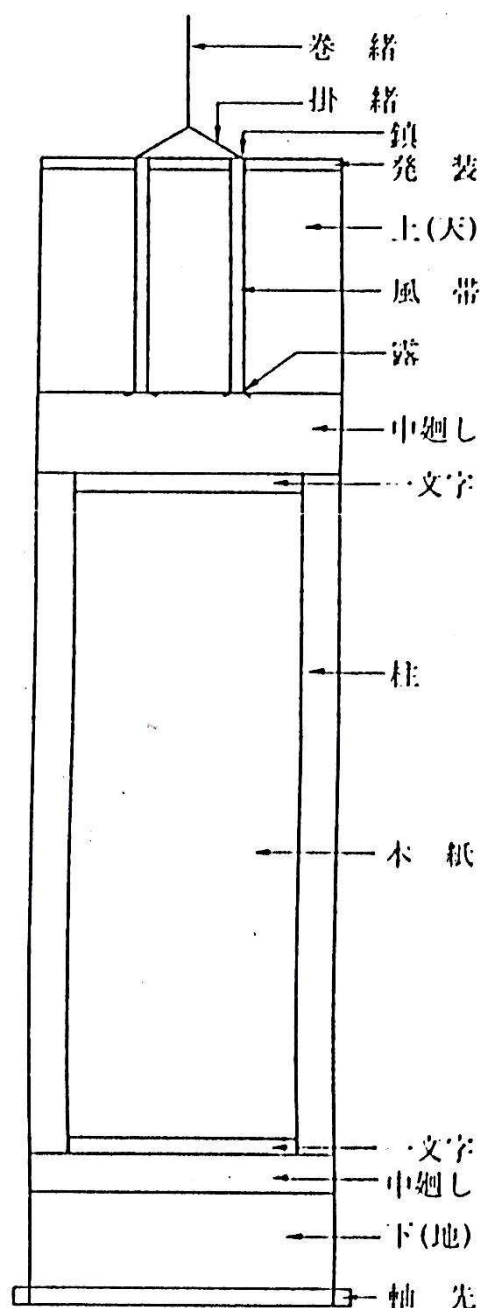
矢筈を右額に立てかけ、つぎに両手で軸先を握って静かに下ろします。

巻癖がついてしまった時は、軽くひと巻程度逆巻にして直します。

掛け終わったら少し離れた場所から表具の高さ、左右のバランスなどを点検します。

釘が高すぎる場合は自在で補なって下さい。

床に良くおさまったら風鎮を掛けます。



3 掛軸のしまい方

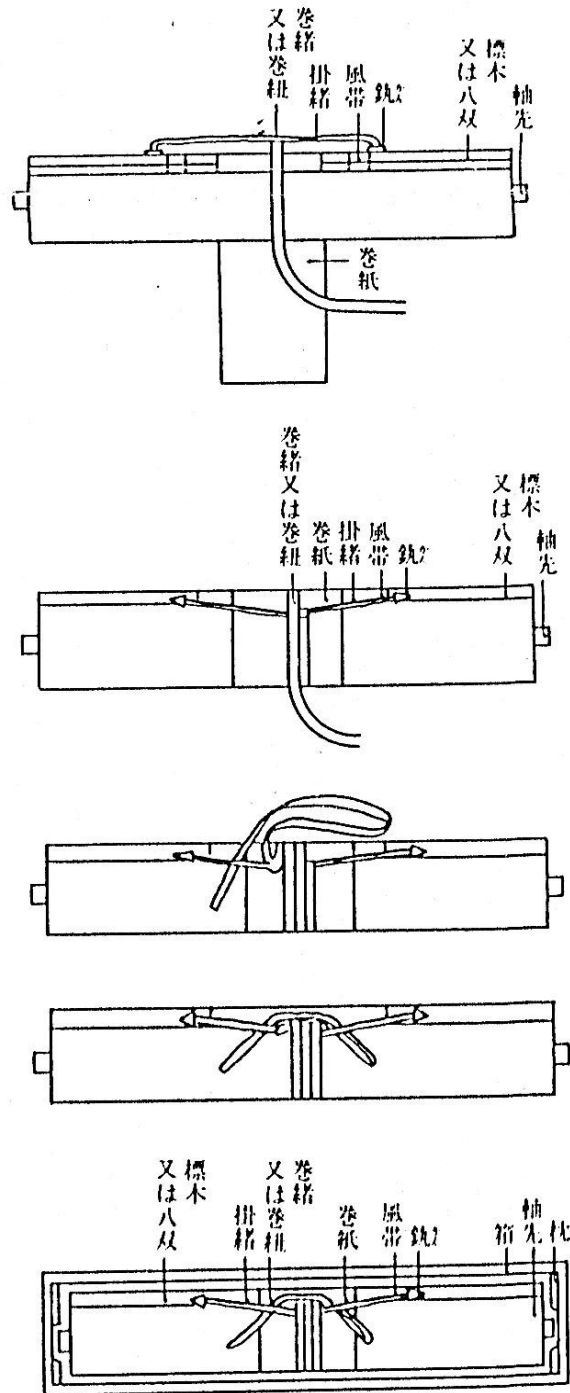
柔らかい羽ぼうきで軽くほこりを払います。

矢筈を右側に立てかけ、軸先を持って上の一文字の所まで巻き上げてから掛けた時と逆の要領で矢筈で釘からはずします。

畳の上で風帯を折り目通りにたたみ、軸をやや柔かめに巻き、掛緒を右図の要領で巻いて、柔らかい紙に包み軸箱に収納します。

特に注意したいのは、上の方から下がっている二本の細い帯（風帯といいます）を折り目通り（右を上にして）たたんで下さい。

垂らしたまま巻き込まないこと。



4 掛軸の保存

しまいつ放なしにしておくとカビてしまうことがあります。

秋の晴天の時を選んで時々虫干しをします。

軸箱もかるく陰干しをして乾いた布でふいて軸を収納します。

ナフタリンや樟脳はシミの原因となりますので専用の防虫剤を利用して下さい。

水やカビのシミは放置するととれなくなります。

また折れシワなども修理仕立直しが必要ですので表具師に依頼して下さい。

